

私は、一九六四年から六八年にかけて、日本貿易振興会（ジェトロ）から派遣されて、オランダのアムステルダム市に駐在したことがある。オランダ人は国際感覚に優れ、大学生となるとほとんどが英語、ドイツ語、フランス語を話す。国際機関でも多く活躍しているし、海外援助にも熱心で、災害などが起こると真っ先に援助の手を差し伸べる。どこかの国のように他の国がどうするかを見て決定するのとは大違いである。

オランダは、市場経済、自由貿易、それに外貨導入を基本的な経済政策とし、日本企業を含め外国企業を積極的

オランダで経験した生活の中の音楽

福川 伸次

● 学校法人東洋大学理事長

に誘致していた。私が駐在し始めたころは、日本から進出していた企業はわずか六社であったが、私が駐在していた四年の間になんと二〇〇社を超えるまでになった。

日本からの観光客もアムステルダム美術館や運河、郊外の風車、そしてキューケンホフのチューリップ公園、ロッテルダムのユーロポートなどを求めて多くやってきた。私は、日本人観光客を連れて四年間で三二回もチューリップ公園を訪れた。オランダは農業国でもあるので、日本の国会議員もよく農村の視察に來られたが、ある議員

が「オランダの農民は西洋館に住んでいるのか」と感心していたのには驚いた。

私は、音楽が好きで、学生時代から下手ながらチェロを習い、大学のオーケストラなどを楽しんでいた。アムステルダムに赴任して、現地の数人の楽器演奏を楽しむグループに入れてもらった。半分がオランダ人で、あとはドイツ人、インドネシア人といった国際色豊かなグループであった。職業も会社員、教員、ホテルの経営者、アイスクリームの工場主など多彩で、英語、ドイツ語、オランダ語が飛び交い、と

きに歌も飛び出す楽しい集まりであった。

週末になると、ときおり老人ホームや病院に慰問演奏に行つて、その人たちに楽しんでもらい、こうした市民交流もあるのかと感心させられた。あちらには、こうした素人のグループがたくさんあつて、市役所に聞くと、どこに行つたらよいか、ちゃんと斡旋してくれるのだそうである。

遊び代でも稼ごうというわけで、カフェバーに行つて演奏したこともあつたが、聴衆はときには手拍子を鳴らし、ときには一緒に歌い、その一体となつた雰囲気には私も興奮を覚えたものであつた。

あるときハーグのカフェで演奏していたとき、知り合いの日本人がそれを聴いていた。日本に帰つて彼がジェット口本部にそれを報告したらしく、本部から「生活に困っているなら連絡してくるように」という電報がきた。私が

金に困つてアルバイトをしていると思つたのであろう。

そうした演奏活動によりたまつたお金で、北ドイツへ遊びを兼ねた演奏に行こうということになった。場所はブレーメンの近くにあるベルヌという農村地帯にある小さな町である。ブレーメンはドイツ第二の港で、ベーゼル川に沿つて一方は北海に、他方は内陸の工業地帯へとつながる。ちよつと郊外に出ると、肥沃な農村地帯が広がっている。

そのベルヌの町の人々は、われわれの訪問を待ちわびていた。町の小学校のホールを借りて催した演奏会は、約三〇〇人が詰めかける盛況であつた。

演奏のあとは、われわれのグループと市民との大ビールパーティとなつた。肩を抱き合つて踊り出す者あり、美声で歌い出す者あり、ビールの一気飲みをする者ありで、音楽と酒と踊りが一体となつたパーティであつた。

そこには、生活の中に音楽が溶け込んでいるという実感があつた。楽譜を追つて、正確に演奏するのではなく、好きなように歌い、好きなように弾き、その中に彼らの音楽があるという感慨があつた。

私は、欧州で体験した生活に溶け込んだ音楽を楽しむ市民の姿を今も懐かしく思い出すのである。

